

列王記第二 24 – 25 章 「主による取り除き」

1 A 王の反逆 24

1 B エホヤキム 1 – 7

2 B エホヤキン 8 – 17

3 B ゼデキヤ 18 – 20

2 A 捕囚 25

1 B ゼデキヤの終焉 1 – 7

2 B 神殿破壊と指導者の殺害 8 – 21

3 B 反逆と服従 22 – 30

本文

列王記第二 24 章を開いてください。これで列王記が終わりますが、本当に、本当にイスラエルの歴史にとって、大きな節目を迎えます。創世記にて、神がアブラハムにカナン之地を与えると約束し、ヨシュア記にてその地に入ってきて、サムエル記にてイスラエル王国が確立したのですが、これらすべてを失ってしまったのが今日見ていくところです。もちろん、主は彼らを見捨てておられません。けれども、前回エレミヤ書からの引用でお話したように、「再び植えるために、引き抜く」ことを主は行われます。彼らが約束の地から引き抜かれるのです。

1 A 王の反逆 24

1 B エホヤキム 1 – 7

24:1 エホヤキムの時代に、バビロンの王ネブカデネザルが攻め上って来た。エホヤキムは三年間彼のしもべとなったが、その後、再び彼に反逆した。24:2 そこで主は、カルデヤ人の略奪隊、アラムの略奪隊、モアブの略奪隊、アモン人の略奪隊を遣わしてエホヤキムを攻められた。ユダを攻めて、これを滅ぼすために彼らを遣わされた。主がそのしもべである預言者たちによって告げられたことばのとおりであった。

私たちは前回、ヨシヤの宗教改革を読みました。ヨシヤがいなくなってから、ユダは四人の王を持ちました。エホアハズ、エホヤキム、エホヤキン、そしてゼデキヤです。彼らはすべて、主の前に悪を行なった王ですが、ここ 24-25 章で強調されている言葉は、「反逆」であります。自分の国を支配する勢力に対して反逆したことによって、悲惨を味わうという流れになっています。唯一、そのまま降伏したのはエホヤキムの子、エホヤキンです。後で詳しく見ます。

前回の学び、23 章の後半で、エホアハズはエジプトのネコが彼を捕え、エホヤキムに変えたとあります。その理由は民がエホアハズを王に立てたからです。民によって選ばれた王ですから、独立する方向に動くことを恐

れて、エジプトに従属するように王を挿げ替えたのです。そのエジプトが、カルケミシュの戦いでバビロンに敗れました。そこで一挙にバビロンは、エジプトの境になっているエジプトの川まで勢力を及ぼし、その中間にあるユダの国をも攻めたのです。ここには書かれていませんが、ダニエル書 1 章に、ネブカデネザルの治世の第一年に王族の一部を捕え移していったことが書かれています。その中にダニエルと三人の友人がいました。紀元前 605 年のことです。それからエホヤキンは、エジプトではなくバビロンに仕えることになりました。けれども三年後、反逆しました。エジプトから何らかの助けが来ると期待していたのでしょう。ところが、この反逆によってエホヤキムは、かえって大変な状況に入ります。ここでバビロンに攻められたことによって、カルデア人（彼らはバビロンの原住民です）、アラム、モアブ、そしてアモン人の略奪隊が攻めてきました。

ここで強調されているのは、主がこれらのことを命じられたことです。そして、預言者たちが告げたとおりに起こった、ということです。一国の王にとって、バビロンの支配から脱することは正しいこと、そうあるべきことです。しかし、霊的にはそうではありませんでした。服することこそが、主の御心だったのです。

私たちも同じです。悔い改めなしの回復などありえません。例えば、ある人が明らかに罪を犯している生活を送っているとします。そこで彼の経営する会社が事業で大きな失敗をしました。その失敗によって出た損失を神が埋めてくださるように祈ろう、と言ったとします。けれども、「それでは祈りましょう。」と張り切って祈ることができでしょうか？いいえ、その罪があるので思い切り祈れないのです。主はエレミヤに対して、「ユダのために祈ってはならない」と言われました（エレミヤ 7:16）。執り成しの祈りをしているのに、それをするなど主が命じられるなんて、信じられないと思ってしまう。けれども、それは、彼らが明らかな罪を犯し、それでも全く悔い改めないで偶像礼拝をしているから、祈るなど主は言われたのです。

24:3 ユダを主の前から除くということは、実に主の命令によることであって、それは、マナセが犯したすべての罪のためであり、24:4 また、マナセが流した罪のない者の血のためであった。マナセはエルサレムを罪のない者の血で満たした。そのため主はその罪を赦そうとはされなかった。

主の命令の根拠となっている出来事が書いてあります。マナセが行ったことのゆえ、であるということです。ここで著者が強調しているのは、「罪のない者の血のため」とあります。マナセは、ヤハウェに仕えようとする者を殺していきました。また、生まれたばかりの赤子を火の中に通すようなことさえ行っていました。「罪はない」といっていますが、もちろん罪が全くないということではなく、そのような仕打ちを受けるに値する悪を行っていない、ということです。

主は、このような迫害に対する厳しい裁きを保っておられます。イエスを殺したユダヤ人たちは、ローマによるエルサレム陥落という裁きを受けました。黙示録の最後には、大バビロンが聖徒や預言者の血を流したので、バビロンは永遠の廃墟となるとの宣言を受けました。ですから私たちがキリストにあって迫害を受けた時は、

それをかえってその人たちのために祈り、恐ろしい裁きから免れるよう願うべきでしょう。

24:5 エホヤキムのその他の業績、彼の行なったすべての事、それはユダの王たちの年代記の書にしるされているではないか。24:6 エホヤキムは彼の先祖たちとともに眠り、その子エホヤキンが代わって王となった。24:7 エジプトの王は自分の国から再び出て来ることがなかった。バビロンの王が、エジプト川からユーフラテス川に至るまで、エジプトの王に属していた全領土を占領していたからである。

先に話したように、エホヤキムの時にこの地域の勢力が転換されました。エジプトからバビロンに変わりました。

2 B エホヤキン 8 - 17

24:8 エホヤキンは十八歳で王となり、エルサレムで三か月間、王であった。彼の母の名はネフシュタといい、エルサレムの出のエルナタンの娘であった。24:9 彼は、すべて先祖たちがしたとおり、主の目の前に悪を行なった。24:10 そのころ、バビロンの王ネブカデネザルの家来たちがエルサレムに攻め上り、町は包囲された。24:11 バビロンの王ネブカデネザルが町にやって来たときに、家来たちは町を包囲していた。24:12 ユダの王エホヤキンは、その母や、家来たちや、高官たち、宦官たちといっしょにバビロンの王に降伏したので、バビロンの王は彼を捕虜にした。これはネブカデネザルの治世の第八年であった。

エホヤキンの治世は短命でした。なぜなら、だれが王となるかということについて自分たちで決めることを、バビロンは由としなかったのです。考えは先のエジプトと同じです。それでバビロンがエルサレムに攻め上り、包囲しました。ここで大事なのは、エホヤキンは降伏しているということです。これが後に、幸いへとつながります。

24:13 彼は主の宮の財宝と王宮の財宝をことごとく運び出し、イスラエルの王ソロモンが造った主の本堂の中のすべての金の用具を断ち切った。主の告げられたとおりであった。

主が告げられたとおり、というのは、かつてヒゼキヤにイザヤを通して主が語られたとおり、ということです。彼の病が治ったということで、バビロンからメロダク・バルアダンからの使者が来ましたが、その時に宝物倉にあるものを彼らに見せました。イザヤがヒゼキヤにこう言いました。「見よ。あなたの家にある物、あなたの先祖たちが今日まで、たくわえてきた物がすべて、バビロンへ運び去られる日が来ている。何一つ残されまい、と主は仰せられます。また、あなたの生む、あなた自身の息子たちのうち、捕えられてバビロンの王の宮殿で宦官となる者があろう。(2列王 20:17-18)」

ここでは、宝物倉にあるもの以外に、ソロモンが造った金の祭具を取って行きました。けれども、午前中お話ししましたように、第三次バビロン捕囚の時は神殿にある青銅の用具や設備もことごとく取って行くことになりません。

24:14 彼はエルサレムのすべて、つまり、すべての高官、すべての有力者一万人、それに職人や、鍛冶屋もみな、捕囚として捕え移した。貧しい民衆のほかは残されなかった。24:15 彼はさらに、エホヤキンをバビロンへ引いて行き、王の母、王の妻たち、その宦官たち、この国のおもだった人々を、捕囚としてエルサレムからバビロンへ連れて行った。24:16 バビロンの王は、すべての兵士七千人、職人と鍛冶屋千人、勇敢な戦士を、すべて、捕囚としてバビロンへ連れて行った。24:17 バビロンの王は、エホヤキンのおじマタヌヤをエホヤキンの代わりに王とし、その名をゼデキヤと改めさせた。

政治、行政、技術、軍事、すべて国として機能する構成員となる人々を捕え移しています。これが第二次バビロン捕囚です。紀元前 597 年のことです。そして、このエホヤキン、エレミヤ書ではエコヌヤと呼ばれていますが、彼について主が強い言葉を残しておられます。

わたしは生きている、..主の御告げ。..たとい、エホヤキムの子、ユダの王エコヌヤが、わたしの右手の指輪の印であっても、わたしは必ず、あなたをそこから抜き取り、あなたのいのちをねらう者たちの手、あなたが恐れている者たちの手、バビロンの王ネブカデレザルの手、カルデア人の手に渡し、あなたと、あなたの産みの母を、あなたがたの生まれた所ではないほかの国に投げ出し、そこであなたがたは死ぬことになる。彼らが帰りたいと心から望むこの国に、彼らは決して帰らない。

なぜ、ここまでエホヤキンに対して主は彼を王権から抜き取る、と言い表しておられるのか、その理由が次にあります。

このエコヌヤという人は、さげすまれて碎かれる像なのか。それとも、だれにも喜ばれない器なのか。なぜ、彼と、その子孫は投げ捨てられて、見も知らぬ国に投げやられるのか。地よ、地よ、地よ。主のことばを聞け。主はこう仰せられる。「この人を『子を残さず、一生栄えない男。』と記録せよ。彼の子孫のうちひとりも、ダビデの王座に着いて、栄え、再びユダを治める者はいないからだ。（エレミヤ 22:24-30）

このように、主は、ヨシヤ、エホヤキム、と続いて、その後にもまだダビデの王座に着く者を決して与えないと強いという強い意志を持っておられたからです。主がダビデに約束されたこと、世継ぎの子が神の子となり、とこしえのダビデの王座に着く、ということ、この時点でやめてしまったかのように語られています。ここが聖書の不思議です。主がダビデに、恵みをもって接してくださり、サウルのように退けることはしないと語られたのに、それを途中で放棄しているかのように見えます。

しかし、そうではありませんでした。メシヤについての約束を思い出してください。創世記 3 章 15 節には「女の子孫」となっていました。普通、そして聖書の中でも男の系図によって成り立っていたのに、メシヤの条件は女からの子種であるのです。そこで新約聖書を見るならば、マリヤがいます。ルカの福音書に、彼女の系図があります。彼女の系図とは書かれてはおらず、あくまでヨセフの名になっていますが、マタイ 1 章を比べれば、ル

カ 3 章のは明らかにマリヤであります。そして彼女の父祖を辿っていくと、ダビデに到達するのです。ダビデの息子ソロモンが王座を継承したのですが、ダビデの息子の一人にナタンがいました（ダビデの友人の預言者ナタンとは違います）。したがって、神はエホヤキンの息子からはダビデの王座に着くものは出しませんでしたが、確かにナタンの子孫から、ダビデの王座に着く者をお出しになったのです。

ヨセフは、エホヤキンの子孫です。したがって、ユダ国の王の継承としては、彼は確かにダビデの子孫であります。けれども、大事なのはヨセフの血がイエス様になかったということです。処女が男の子を産む、というのがイザヤ 7 章に書いてあるメシヤの印だからです。

神という方は不思議な方です。決して神は、このようにご自身に反逆した王の継承を認められませんでした。悔い改めない彼らの罪を赦すことはありませんでした。しかし、神はその正義を保ちつつ、なおかつご自身の恵みの約束を矛盾なく実現してくださったのです。キリストの十字架がまさにそうです。神は私たちの罪を罰しないでおくことは決してありません。その罪は残ります。けれども神は私たちを滅ぼしたいと願われていません。そこで、その恵みを明らかにするために、ご自身の子キリストを刑罰に科すことによって、アブラハムの子孫を祝福するという約束を守られました。

3 B ゼデキヤ 18 - 20

24:18 ゼデキヤは二十一歳で王となり、エルサレムで十一年間、王であった。彼の母の名はハムタルといい、リブナの出のエレミヤの娘であった。24:19 彼は、すべてエホヤキムがしたように、主の目の前に悪を行なった。24:20 エルサレムとユダにこのようなことが起こったのは、主の怒りによるもので、ついに主は彼らを御前から投げ捨てられたのである。その後、ゼデキヤはバビロンの王に反逆した。

ゼデキヤは、ヨセフの息子です。ですから、ヨセフの息子でユダ王朝は滅びます。初めはエホアハズ、その次にエホヤキム、そしてゼデキヤです。そしてこの三人の王の全てが、同じ過ちを犯しました。「反逆する」ということです。

そして主がユダの民に対して行われたことを、「御前から投げ捨てられた」と言われています。先の 3 節には、「主の前から除く」とありました。主ご自身の感情、そして強い意志が表れています。そして、「エホヤキムがしたように、主の目の前に悪を行なった」とありますが、エレミヤ書を見ますと、エホヤキムのような自発的な悪は行いませんでした。彼の問題は、「聞きはするが、行わない」という罪でした。エレミヤを個人的に呼び出し、これからの行く末を彼に尋ねます。エレミヤははっきりと答えます。けれども、周囲の側近、バビロンに降伏しなさいというエレミヤの言葉に激しく反抗している側近を恐れていました。彼は、臆病だったのです。そのため、行っていることは結局、兄のエホヤキムと同じだったのです。

私たちはとかく、「そのつもりはなかった」という言葉を使います。けれども、神はこの臆病、人への恐れを深刻

に受け止めておられます。天のエルサレムに入れない者たちを神は列挙しておられますが、こうあります。「しかし、おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。（黙示 21:8）」他の人の事が気になって、神の言葉に従えないというのは、火と硫黄の池に投げ込まれる最初の特徴として数えられているのです。ヘブル書 10 章 38-39 節にもこうあります。「「・・・わたしの義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのこころは彼を喜ばない。」私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。」

2 A 捕囚 25

1 B ゼデキヤの終焉 1 - 7

25:1 ゼデキヤの治世の第九年、第十の月の十日に、バビロンの王ネブカデネザルは、その全軍勢を率いてエルサレムを攻めに來て、これに対して陣を敷き、周囲に壘を築いた。25:2 こうして町はゼデキヤ王の第十一年まで包圍されていたが、25:3 第四の月の九日、町の中では、ききんがひどくなり、民衆に食物がなくなった。

この時のエルサレムの様子が、哀歌で写實的に描かれています。ユダ王国末期に預言を行なったエレミヤは、この包圍の時もユダの民と共におり、エルサレムが破壊された時も共にいました。「夜の間、夜の見張りが立つころから、立って大声で叫び、あなたの心を水のように、主の前に注ぎ出せ。主に向かって手を差し上げ、あなたの幼子たちのために祈れ。彼らは、あらゆる街頭で、飢えのために弱り果てている。『主よ、ご覧ください。顧みてください。あなたはだれにこのようなしうちをされたのでしょうか。女が、自分の産んだ子、養い育てた幼子を食べてよいのでしょうか。主の聖所で、祭司や預言者が虐殺されてよいのでしょうか。幼い者も年寄りも道ばたで地に横たわり、私の若い女たちも若い男たちも剣に倒れました。あなたは御怒りの日に虐殺し、彼らを容赦なくほふりました。あなたは、例祭の日のように、私の恐れる者たちを、四方から呼び集めました。主の御怒りの日に、のがれた者も生き残った者もいませんでした。私が養い育てた者を、私の敵は絶ち滅ぼしてしまいました。』（2:19-22）」

25:4 そのとき、町が破られ、戦士たちはみな夜のうちに、王の園のほとりにある二重の城壁の間の門の道から町を出た。カルデヤ人が町を包圍していたので、王はアラバへの道を行った。25:5 カルデヤの軍勢が王のあとを追い、エリコの草原で彼に追いついたとき、王の軍隊はみな王から離れて散ってしまった。25:6 そこでカルデヤ人は王を捕え、リブラにいるバビロンの王のところへ彼を連れ上り、彼に宣告を下した。25:7 彼らはゼデキヤの子らを彼の目の前で虐殺した。王はゼデキヤの両目をえぐり出し、彼を青銅の足かせにつないで、バビロンへ連れて行った。

町が破られた、とありますが、バビロンが一時期エジプトとの戦いにおいて、包圍が手薄になった時がありました。その隙をねらって、戦士たちが町を出て、王もいっしょに行きました。そして、アラバ、すなわちヨルダン川渓谷へと向かいます。

けれども、エリコの草原でカルデヤの軍勢が王に追いつきます。ここが、聖書的には大きな意味を持ちます。ヨシュアたちが約束の地に入る時に、エリコから始まりました。けれども、イスラエルが約束の地から引き抜かれる時、エリコで終わりました。けれども、再び新約時代に、神の福音はエリコの地域から始まりました。そうです、そのユダの荒野において、そのヨルダン川において、バプテスマのヨハネがメシヤの先駆者として現れ、メシヤご自身がエリコのすぐ近くのヨルダン川でバプテスマを受けられたのです。

そしてゼデキヤはリブラに連れていかれました。かつて兄エホアハズも、同じところでエジプトのパロ、ネコによって幽閉されたところでした。そしてそこで、彼は悲惨な目に会います。自分の目の前で息子が虐殺されて、その上、目が抉り出されたのです。つまり、自分の視覚に残る最後の記憶が息子の虐殺だ、ということです。バビロンによる、王の継承は絶対に出来ないのだ、という強い脅しのメッセージでもあります。

ところで、バビロン捕囚について数多く預言した預言者は、エレミヤの他にエゼキエルがいます。エレミヤは最後の最後までエルサレムに残った預言者でしたが、エゼキエルは第二次捕囚、エホヤキンが捕え移された時と共に捕え移された祭司の一人でした。その捕囚の民に対して、彼らがまだかたくなで、エルサレムがバビロンから解放されるという期待を持っていたところで、神の預言を告げました。彼の預言は、単なる言葉ではありません。パントマイムのような、演技を人々の前で見せました。そして言葉では耳を傾けない民に対して、注意をひこうとしたのです。

その一つが、こっそり荷物をまとめて、出ていく演技でした。壁に穴をあけて、出ていきます。それで主はこう語ります。「人の子よ。反逆の家、イスラエルの家は、あなたに、『何をしているのか。』と尋ねなかったか。彼らに言え。『神である主はこう仰せられる。この宣告は、エルサレムの君主、およびそこにいるイスラエルの全家にかかわるものである。』また言え。『私はあなたがたへのしるしである。私がしたようなことが彼らにもなされる。彼らはとりことなって引いて行かれる。彼らのうちにいる君主は、暗いうちに荷物を背負って出て行く。出て行けるように壁に穴があげられる。彼は顔をおおうであろう。彼は自分の目でその地をもう見ないからである。』わたしはまた、彼の上にわたしの網をかけ、彼はわたしのわなにかかる。わたしは彼をカルデヤ人の地のバビロンへ連れて行く。しかし、彼はその地を見ないで、そこで死ぬ。 (12:9-13) 」こういう意味でした。そして、非常に不可解だったのは 13 節の言葉です。イスラエルの君主がバビロンに連れていかれるけれども、その地を見ないで死ぬ、ということです。こういう言葉を見つけると、多くの人が「ああ、聖書は難解だ。文法も分からない人が書いているのだ。」と批判や批評をします。けれども、後知恵を持っている私たちは分かりますね、途中で目が抉り出されたのです。それでバビロンの地に行くのだが、その地を目で見ることができない、という意味です。

2 B 神殿破壊と指導者の殺害 8 - 2 1

25:8 第五の月の七日——それは、バビロンの王ネブカデネザル王の第十九年であった。——バビロンの王の家来、侍従長ネブザルアダンがエルサレムに来て、25:9 主の宮と王宮とエルサレムのすべての家を焼き、そのおもだった建物をことごとく火で焼いた。25:10 侍従長といっしょにいたカルデヤの全軍勢は、エルサレムの回り

の城壁を取りこわした。

神殿が破壊された日を、ユダヤ教徒は今でも覚えています。これを、「ティシュア・バ・アブ」と言って、今の暦ですと七月になります。ユダヤの暦では、568年に起こったこの日と、紀元70年にローマによって第二神殿が破壊された日と、全く同じになったということで、そこに神の手を感じるわけです。

そして今、ダビデの町に行きますと、そこには聖書の記述が考古学の発掘で次々と確認されています。その一つが、王宮の家の焼け跡です。厚い灰の層があります。まさに、この586年にバビロンによって焼き尽くされた跡です。

25:11 侍従長ネブザルアダンは、町に残されていた残りの民と、バビロンの王に降伏した者たちと、残りの群衆を捕え移した。25:12 しかし、侍従長は国の貧民の一部を残し、ぶどう作りと農夫とした。

バビロンは、降伏した民を殺すことはありませんでした。彼らをそのまま捕え移しました。このことをエレミヤは預言し、最後は投降することを勧めていました。そして侍従長は、貧民の一部を残して、その地が荒れ果てて使えないようになってしまわないように、そこを耕させました。

25:13 カルデア人は、主の宮の青銅の柱と、主の宮にある青銅の車輪つきの台と、海とを砕いて、その青銅をバビロンへ運んだ。25:14 また、灰つぼ、十能、心切りばさみ、平皿、奉仕に用いるすべての青銅の器具を奪った。25:15 また、侍従長は火皿、鉢など、純金、純銀のものを奪った。25:16 ソロモンが主の宮のために作った二本の柱、一つの海、車輪つきの台、これらすべての器具の青銅の重さは、量りきれなかった。25:17 一本の柱の高さは十八キュビトで、その上の柱頭も青銅で、その柱頭の高さは三キュビトであり、柱頭の回りに網細工と、ざくろがあって、それもみな青銅で、他の柱も、網細工までも同様であった。

午前礼拝で話した通りです、これを神はこの神殿を建てたソロモンに警告したことでした（1列王 9:7-8）。ところで第一次、第二次捕囚の時に持ってきた金の用具は、ネブカデネザルはこれらを自分の神々の宮に安置しました。バビロンの最後の王ベルシャツアルは、その宮から金や銀の器を持ってきて、なんと酒宴でそれを用い、金、銀、鉄、木で造った神々を賛美したのです。それからクロスがバビロンを倒してユダヤ人を解放したのですが、彼はこの宝物倉を開けて帰還するユダヤ人に神殿を再建するように促します（エズラ 1:7-11）。

25:18 侍従長はさらに、祭司のかしらセラヤと次席祭司ゼパニヤと三人の入口を守る者を捕え、25:19 戦士の指揮官であったひとりの宦官と、町にいた王の五人の側近と、一般の人々を徴兵する將軍の書記と、町にいた一般の人々六十人を、町から捕え去った。25:20 侍従長ネブザルアダンは彼らを捕え、リブラにいるバビロンの王のところへ連れて行った。25:21 バビロンの王は彼らを打ち、ハマテの地のリブラで殺した。こうして、ユダはその国から捕え移された。

彼らこそ、祭司や戦士、宦官、王の側近こそが、バビロンに反抗するため民をそそのかし、また王に圧力をかけた張本人です。ですから彼らは殺されます。

3 B 反逆と服従 22 - 30

25:22 バビロンの王ネブカデネザルは、シャファンの子アヒカムの子ゲダルヤを、ユダの地に残った残りの民の上に総督とした。25:23 将校たちと、その部下たちはみな、バビロンの王がゲダルヤを総督としたことを聞いて、ミツパにいるゲダルヤのもとに来た。すなわち、ネタヌヤの子イシュマエル、カレアハの子ヨハナン、ネトファ人タヌフメテの子セラヤ、マアカ人の子ヤアザヌヤ、これらとその部下たちであった。25:24 そこでゲダルヤは彼らとその部下たちに誓って、彼らに言った。「カルデヤ人の家来たちを恐れてはならない。この国に住んで、バビロンの王に仕えなさい。そうすれば、あなたがたはしあわせになる。」25:25 ところが第七の月に、王族のひとり、エリシャマの子ネタヌヤの子イシュマエルは、十人の部下を連れてやって来て、ゲダルヤを打ち殺し、ミツパで彼といっしょにいたユダ人たちと、カルデヤ人たちを打ち殺した。そこで、身分の下の者から上の者まで、民はみな、将校たちとともに、エジプトへ立って行った。カルデヤ人を恐れたからである。

なんと、残されたわずかな民は、捕囚後でさえもかたくなにバビロンに歯向かいます。ゲダルヤは、あのヨシヤ王に律法を読んで聞かせた書記シャファンの孫です。彼はエレミヤの言葉を真剣に捉えていました。そこでバビロンは彼もエレミヤと同じように丁重に扱い、丁重に扱っただけではなく、わずかな残されたユダの民を治めるように命じたのです。詳しいことはエレミヤ書 40 章以降にあります。

ところが王族の一人でイシュマエルが、今でいうテロリストとなりました。ゲダルヤを暗殺しました。ゲダルヤにはヨハナンという将校が付いていましたが、彼がイシュマエルにすぐに対峙したので、イシュマエルの一団は逃げていきました。ところがそれからが問題です。エレミヤにこれからどうすればよいか、主の言葉を教えてくださいと頼みました。エレミヤは祈って、十日待ちました。十日後に主の言葉があり、バビロンに服して、ここで幸せに暮らなさいというものでした。ところが、ヨハナンと他のユダヤ人はなんと、「あなたは、偽りを語り高ぶっている！」と責めました。彼らは御心を求めていたのではないのです？エレミヤから、自分たちの決断、エジプトに降ることについてのお墨付きをもらいたかったのです！そしてバビロンの王を恐れてエジプトへ逃げていったのです。エレミヤも無理やり連れていきました。エレミヤは本当に悲慘な預言者ですが、ここまで反逆して、最後の最後まで自ら滅びの道に向かう者たちに預言を続けたのです。自分たちが出てきたエジプトに戻り、そしてもう弱まったエジプトにおいてバビロンの侵略の中で死に絶えるのです。

ところが最後、王も民も反逆して悲慘な結末を自ら招きましたが、最後にわずかな希望が映し出されています。

25:27 ユダの王エホヤキンが捕え移されて三十七年目の第十二の月の二十七日に、バビロンの王エビル・メロダクは、彼が王となったその年のうちに、ユダの王エホヤキンを牢獄から釈放し、25:28 彼に優しいことばをか

け、彼の位をバビロンで彼とともにいた王たちの位よりも高くした。25:29 彼は囚人の服を着替え、その一生の間、いつも王の前で食事をした。25:30 彼の生活費は、その一生の間、日々の分をいつも王から支給されていた。

あの降伏した、エホヤキンです。彼は 18 歳で王となり、三か月後に捕え移され、そして 37 年後、55 歳辺りで牢から出ました。バビロンの王はネブカデネザルではなく、その息子エビル・メロダクです。彼が釈放して、優しい言葉をかけて、なんと王の前で食事をしました。これは以前、ダビデがサウルの子、ヨナタンの子、メフィボシエテに対して示した恵みと変わりません。死んで当然の身であるのに、バビロンの王のそばにいるという条件で、王と同じものを受け取ることができるという特権です。

降伏しなさいというのが、神がエレミヤを通して与えられた言葉でした。けれども、ゼデキヤは、バビロンから救われるという兆しが少しでも見えると、エレミヤに対して、「我々のために祈ってくれ」と頼みました（37 章参照）。エジプトのパロが軍勢を引き連れてきたので、バビロンが戦いに出て行って、包囲が薄くなったからです。エレミヤは神の言葉を伝えて、「バビロンは引き返してくる。そして、この町を攻め取って火で焼く。」と告げました。そして、ゼデキヤの周囲の者たちは彼を牢に入れて閉じ込めてしまったのです。その一人がこう言いました。「あの男は、この民のために平安を求めず、かえってわざわざを求めているからです。（38:4）」

どちらが災いを招いたのでしょうか？もちろん、バビロンに反抗した彼らです。しかし、彼らの言葉は実に今の私たちに当てはまらないでしょうか？ 私たちの信じているのは福音です。福音は、私たちが罪を犯し、そして罪の中で死んでおり、神の怒りを受ける不従順の子らだと教えています。これらを「平和を求めず、災いを求めているからです。」というそりを受けてもおかしくありません。けれども、悔い改めるならば、神がキリストにあって、その死によって和解を与えてくださったのですから、悔い改めてこの方の和解を受け入れるのであれば、災いではなく平和が与えられます。福音、良い知らせの前にまず、悪い知らせがあります。その悪い知らせを甘んじて受けて、そして神の憐れみを求める時に、神は憐れんでくださいます。

ある時に、「これは不倫の関係ではないのか？」と疑われるような男女がいました。その女性は祈れば、とてもきれいに、クリスチャンらしく祈れます。そして私に、その関係が祝福されるように祈ってほしいと言われたことがあります。私は祈りませんでした。「御心になるように」と祈ったのでしょうか？ 神の意志に服することが、まず初めにしなければいけないことです。そうすれば、主は自分を低くした者を引き上げてくださいます。次回は、歴代誌です。帰還民が、創世記の初めから今の自分に至るまでの系図を書き記します。私たちもまた、これまでの聖書の話と同じようにおさらいしながら、イスラエル王国を眺め直していきます。